

《公開講演会記録》

私の長春留学生活
残留孤児2世の体験を語る

ノンフィクション作家 城戸 久枝



私は2007年に『あの戦争から遠く離れて 私につながる歴史をたどる旅』という本を出版した。第1部では、中国残留孤児だった父の半生を、第2部では、私が父の半生を10年かけて取材した過程を記している。2009年にNHKの土曜ドラマ「遙かなる絆」として放送されたので、ご覧になった方もいらっしゃるかもしれない。

ある。1941年、満州国軍の軍人だった父と愛媛県八幡浜市出身の母の長男として、旧満州東北部、富錦で生まれた。1945年8月。ソ連軍の侵攻の際、実の両親と生き別れてしまった。当時父は3歳9カ月。数日間に及ぶ逃避行の末たどり着いた、黒龍江省牡丹江市の北部に位置する頭道河子村で、中国人の孫舜昌、付淑琴夫妻に引き取られた。父は「孫玉福（スヌユーフー）」と名付けられ、夫婦に実の子のように大切に育てられた。養父は小学校の時に病気で他界、その後は貧しいながらも、養母と2人、寄り添い合いながら生きてきた。

村ではほとんどの子どもたちが小学校4年生を終えると家の仕事を手伝っていたが、父は高校まで進学することができた。村では3年ぶりの高校生だった。生活は苦しかったが、父に勉強を続けさせるために、淑琴はあちこち奔走し、村の書記に土下座をして頼んで、奨学金をもらうための紹介状を書いてもらった。このころの父の夢は大学に進学し、小説家になり、母親に楽をさせることだった。

父 城戸幹について

私の父、「城戸幹」は中国残留孤児で

貧乏ではあったが、養母淑琴は父を学校に行かせた。父もその養母の気持ちにこたえるべく勉強した。成績は良かった。

村では日本人の子どもと知られていたが、父と養母の深い愛情に包まれた関係を見て、周囲も本当の親子のように思うようになってきた。中学校、高校と寮生活を送るようになり、父が日本人であることを知る人は周りにいなくなった。しかし、この貧乏ながらも愛情に満ち



た2人の生活と、親孝行したいという父の淡い夢はもろくも崩れてしまうことになる。それは高校時代のある事件がきっかけだった。

当時、父の通っていた高校では、「交心」運動が起こっていた。党と毛沢東に心をささげる運動である。学生一人一人が、共産党と毛沢東に対して忠実であるかどうかを告白した。父もまた、毛沢東や共産党の政策を称賛し、党と毛主席について社会主義建設に貢献すると発言もした。ところがその日の帰り、同級生に

「日本人のくせに：日本鬼子」と言われたのである。父は自分が日本人であることを同級生たちに告げてはいなかった。誰も父が日本人であることは知らないはずだった。しかし、同級生たちはみんな知っていたのである。父はそれまで履歷書に、漢民族と書いていたが、それを日本民族と書き換えた。

そして、日本人と書いたことが原因で、大学受験に失敗してしまった。

将来の夢を断たれ、父は絶望した。国籍を日本人と変えたために、やりがいのあった教師の仕事も続けられなくなった。それは中国での未来をすべて失ったような、そんな感じだった。そして父は日本の本当の両親を探すために、日本赤十字社などへの手紙の投函を始めた。3000通以上の手紙を出した。返事は来なかったが、自分の両親を探すために、日本へ手紙を出し続けた。

そして、1967年、ようやく本当の両親が見つかったのである。幼いころの記憶をなくしていた父は、このとき初めて自分の名前が「城戸幹」ということを知った。両親からの手紙には特徴として、頭に階段から転げ落ちた傷がある、幼いころリンパを切った痕があると書かれていた。父はすぐに、頭を丸坊主にし

て傷跡の写真をとり、両親のもとに送った。このとき、父はすぐに日本に帰国できると思っていた。しかし、現実はそのようではなかった。中国から出国する許可がなかなか下りなかったのである。

中国では文化大革命が起こっていた。日本人であるという理由で、いつ命を奪われてもおかしくないような状況に父も置かれていた。それでも、養母や友人たちの支えもあり、父は日本への帰国の許可が下りることを待ち続けた。そして1970年、28歳のときに、ようやく許可があり、日本にやっと帰国することができた。日中の国交が正常化する2年前のことである。

しかし、それは、本当の親子以上に心の通いあった、養母淑琴との辛い別れをもたらずのものでもあった。

養母との辛い別れを経て、父は城戸幹として、日本に帰国して新しい人生を歩むことになった。1970年4月のことである。

当時はまだ日中の国交が正常化していなかった時代である。「中国残留孤児」という言葉も当然なかった。それでも、空港では多くの報道陣に囲まれた。新聞でも地元の愛媛新聞や産経新聞などで報道された。NHK松山放送局には、父が



父とのツーショット 牡丹江のほとり

帰国し、愛媛に戻ってきた当時の様子が映像として残っていた。その中でも、特に印象的だったのは、実母との再会のシーンである。本当は「お母さん」と抱きつきたかったかもしれない。でも母親が感慨深そうな表情で深々と頭を下げた。父もその実母にならって、深々と頭を下げていた。

私が留学したきっかけ

次は、私なぜ中国に留学したのか、そしてなぜ、父のことを書こうと思ったのか、そのきっかけについて話したいと思う。

多くの残留孤児の方々は中国で結婚し、子どもをもうけてから家族で帰国しているが、父は28歳と若かったこともあり、まだ結婚していなかった。帰国後、仕事をしながら通っていた定時制高校の同級生だった母と知り合い、1974年に結婚した。母は愛媛県の山間部にある小さな集落の出身だ。中国とは全く縁もなく、もちろん中国語も話すことはできない。私は両親の次女として、1976年に生まれた。

幼いころは、実は、父が中国から帰国したということを受け入れられなかった。だから、友人や近所の人には、父と中国との関係を知られたいくと思っていた。父は時々、中国語で知り合いに電話をかけることがあった。そのとき、父が話す中国語を聞かれたくなくて、真夏でも、家中の窓を閉めてまわったこともあった。ある時には、同級生に、「久枝ちゃんのお父さんは中国人？」と聞かれたこと

があった。そのときは、私は、「違う、お父さんは普通の日本人だ」と、必死で否定した。

当時の私にとっては、父が中国から帰国したということを知られたら、同級生たちにいじめられてしまうのではないかとこの恐怖があった。実際にいじめられることはなかったが、このように中国を受け入れなかったのも、もちろん中国語を勉強する気もなかったし、父のことを知ろうという気もなかった。

ただ、それでも私は自分と中国につながりがあるということは漠然と分かっていた。昔から自分には、父方、母方の祖母に加え、中国のおばあちゃんがいることが当たり前だった。小学校3年生のときは、家族5人でおばあちゃんに会いに、牡丹江まで行った。文化や言葉の違いに戸惑うこともあったが、おばあちゃんが私たちを本当に思ってくれているのは伝わった。そして牡丹江を離れるとき、幼い私や姉、そして弟みんな涙を流したのを覚えている。

幼少のころ、父がよく歌ってくれた歌がある。「植樹歌」という、河のほとりに木を植えましようという中国の唱歌だ。意味も分からずよく口ずさんでいたものだ。



父が育った頭道河子村

「遙かなる絆」をご覧になった方は、聞き覚えがあるかもしれない。

この歌は、ドラマの挿入歌で使われている。歌っているのは、一つ上の姉で、シンガーソングライター、一江ウタカだ。中学、高校、大学と進学するうちに、少しずつ、父のことを受け入れられるようになってきた。そして、転機が訪れたのは大学3年のときだった。父の勧めで中国の大連に住む日本人夫妻の家に1カ月ほどホームステイをした。そこで、中国という国を肌で感じた。

さらに、かつて日本人が住んでいたこ

ろにあったマンホールを踏んだことで、私がいる現在と、あの戦争の時代がつながったような気がした。そして、この中国で父は生まれ育ったのだと初めて実感した。私の中で、父のことをもっと知らなければならぬという衝動がわいてきた。そして私は中国へ長期で留学することを決めた。留学したいと父に伝えたと、父は大反対だった。それでも、時間をかけて何とか説得して、ようやく留学を許してもらった。

留学先は、吉林省長春市の吉林大学である。この大学を選んだ理由は、中国東

北地方にあったこと、日中関係の歴史を学べるということ、そして何よりも、牡丹江が比較的近かったということだ。

留学を控えたある日。父が段ボール箱に入った資料を部屋に持ってきた。「ちょっとこれを見てみなさいや」と言って、部屋から出ていった。段ボールの中には父が中国にいたころの、

帰国に関する資料や写真、手紙、日記などがぎっしり詰まっていた。その中に手紙をファイルしたものがあつた。手に取りばらばらとめくっていると、ふと、ある手紙に目が留まった。それは父が日本赤十字社に宛てて書いたものだった。私はまだ中国語はほとんど分からなかったが、漢字を見て何となく意味を理解することができた。父が、自分の身元を探してほしいと懇願する内容の手紙だった。

そして、手紙の最後の部分を目にしたとき、衝撃を受けた。手紙の最後には、「孫玉福」と書かれていた。私は当然、父のサイン、城戸幹という名前が書かれていると思っていた。しかし、実際には私の知らない「孫玉福」という名前が書かれていたのだ。中国で28年間、父が中国で名乗ってきた名前すら私は知らなかった。中国にいたのだから、中国名があるのは当然なのだが、自分の父が、城戸幹以外の名前を持っていたとは考えもしなかったのだ。そして、この誰にも知られてこなかった父の半生を娘の私が残さなければならぬという強い思いがわき出してきた。

「お父さんのことを、本に書きたい」父にそのことを伝えた。しかし、父は全く相手にしてくれなかった。当然のこ

とだ。それまで全く中国にも自分にも興味を持とうとしなかった娘に、簡単に分かる話ではない。しかし、私も引き下がらなかった。

父のことを書きたいという思いを抱いたまま、留学先の長春市へと旅立った。

留學生生活1年目

異文化の衝突と言葉の壁

1997年9月。私の長春での留學生活が始まった。

留學生生活は順調とは言えなかった。それまで、大学の第二外国語でしか中国語を勉強したことがなかった。言葉が全く分からない環境に放り込まれるというのは、本当に不安だった。その上、大学では予想外のことが起こった。

本来、私は「普通進修生」という立場で、学部の授業を聴講しながら、中国語の授業を受ける予定だった。ところが、何の手違いか、大学院に配属され、しかも中国語学習の授業を受けることはできないというのだ。同僚にいた日本人の女性が奔走してくれて、不本意な形ではあるがなんとか、中国語の勉強ができるようになった。

私のルームメイトはディマというブル

ガリア人だった。私より2つ年下、英語とフランス語、ロシア語を操るとも優秀な女の子だった。

彼女との出会いも大きな出来事だった。日本人と欧米人。考え方がまるっきり違いう上に、話そうにも二人とも十分に言葉が話せない。だから何か問題が起きて、喧嘩をしようにも、喧嘩にさえならない。それでも勉強熱心な彼女に触発されて、私も負けまいと一生懸命勉強した。それが結果的には中国語の上達に大いに役立ったのだと思う。

私がかくじけそうになったとき、父から電話や手紙が届いた。なかでも一番印象的だったのは、父から届いた最初の手紙だ。そこには初めての留學生生活を心配し、私を励まそうとする父の気持ちが綴られていた。そして、この言葉が書かれていた。

「車到山前必有路」

車が山の前にきても、必ず、乗り越える道はある

どんな困難でも、それを乗り越えることができるという意味だ。

この言葉を私は、自分なりに解釈して、「進めば必ず道開く」という自分自身への励ましの言葉として、辛い時に思い出すようになった。

最初にこの言葉を受け取ったときには全く知らなかったが、父への取材を進める中で、この言葉が実は、父が大学受験に失敗したときに、高校の恩師から贈られた励ましの言葉だったということを知った。父が恩師に贈られた言葉を、娘の私に送ってくれた。この先もずっと、大切にしていきたいと思っている。

留學生生活2年目

「日本人」という苦悩

自分が「日本人」である、ということを感じさせられたのも、留學生生活の大きな経験だった。中国国内を旅行したり、街を歩いていたりしていたとき、私が日本人と分かると「日本が中国で何をしていたか知っているか」と問われることが多かった。ときには小さな子どもに「日本鬼子」と言われたこともあった。最初は私なりの考えを限られた語彙で答えようとしたが、やがて、それにも疲れてしまった。私はだんだんと、自分が日本人だと明かさないうようになっていった。

留學2年目、1999年5月のことだ。私は日本人とは明かさずに、市内の社会人向けの英語教室に通っていた。先生はドイツ系カナダ人。友人もできて、英語

の授業を楽しみにしていた。ある日、NATO軍がユーゴスラビアで中国大使館を誤爆したという事件が起こった。授業が始まると、生徒の多くは先生に質問を重ねた。先生は「残念ですが、私は国を支持する」とはっきり言い、生徒たちの感情はさらにヒートアップしていった。

その状況の中で、突然ある女性が立ち上がって「私は日本人が憎い」と言った。何の脈絡もなく、突然憎いといわれて、私は驚いた。そして、あろうことか、友人が小声で、「彼女は日本人だ」と言ってしまった。感情の持っていき場を失った同級生たちは一斉に私を取り囲み、矢継ぎ早に質問をしてきた。「日本人は歴史を知らないって本当?」「あなたは日本の侵略戦争のことをどう思う?」……興味津々に責めたてる同級生たちに囲まれ、私は堪らない気持ちでいた。中国を知ろうと思って私はここにいる。なのに、「日本人」というだけで、どうしてこんな思いをしなければならぬのか。その日、授業を終えると私は逃げるように教室を出た。そしてそれ以降、授業に出なくなつた。

最初は理不尽な、という気持ちでいっぱいだった。しかし、時間が経つにつれ、別の思いが湧いてきた。もう戦争から半

世紀以上が過ぎた今でさえ、こんなことが起こる。戦争の記憶がまだ新しいあの時代を、父は「日本人」を背負って生きなければならなかった。父以外の多くの残留孤児の人々の苦勞の一部が垣間見えたような気がした。

中国の親戚

シュンカとの出会い

留学中、牡丹江にいる親戚たちに会いに行き、交流を深めた。なかでも父が日本に帰国したあと、祖母と一緒に暮らし、最後を看取ったシュンカ姉ちゃんの存在は大きかった。

私は休みがあるごとに牡丹江を訪れ、シュンカ姉ちゃんの家滞在していた。そこは、中国のおばあちゃんが最後まで暮らした家でもある。

まだ私あまり中国語を話せなかったころ、シュンカ姉ちゃんは毎晩、夫と2歳の娘が寝静まった後、一時間くらい、私の中国語の勉強に付き合ってくれた。分かりやすくゆっくり、丁寧に。彼女の中国語は自然に私の耳に入ってきた。

彼女は、父が帰国したあとのおばあちゃんの話をよくしてくれた。「お父さんが帰国したあと、おばあちゃんは毎日泣い

ていたんだって。それをお父さんの親友のゾウさん、ウーさんが会いに来て、慰めてくれていたんだって」などと。

よく餃子も作ってくれた。シュンカ姉ちゃんの餃子の味は、父の味によく似ている。それを彼女に伝えると、「当たり前よ。あなたのおばあちゃんから習った味なんだから」と教えてくれた。

シュンカを通じて、私は結局一度しか会えなかった中国の祖母のこと、そして父のことを少しづつ知ることができた。父の友人たちにも会いに行った。その中には、ゾウさん、ウーさんという二人の男性がいた。父が教職をやめた後に始めた、肉体労働に仕事をしていたころからの親友だ。

彼らはよく父との思い出話をしてくれた。特に印象的だったのは、ウーさんが話してくれた、1970年に父が祖母と別れるときのエピソードだ。

「別れの列車が近づいてきている。すると待っていた養母が倒れてしまった。その養母の姿を見て、玉福は駆け寄って抱きついて、二人でずっと抱き合っていているうちに、出発の時間になってしまった。もう列車に乗らなければならぬのに、二人は離れようとしなない。だからオレたちが無理やり二人を引き離して、

玉福を列車に乗せたんだ」

ドラマ、遙かなる絆でもまた、この列車での別れのシーンが印象深く描かれている。しかし、現実、もっともっと違ったエピソードがあったという。

実は、2年ほど前、父と講演させていただいたとき、私は初めてその話を聞いた。

「ドラマでは玉福、行かないでと言っています。でもそうじゃないんです。もう行け、行きなさいとお母さんは言ったんです。それが辛くて辛くて。どんな思いでそう言ったのかと思うと……たまりませんね」

私にとって、中国の留学は、中国語はもちろん、中国の文化を体験できただけでなく、私の知らない父、城戸幹と養母、付淑琴との話を、いろいろな人から聞くことができた、貴重な経験だった。

帰国後の私

父の半生の執筆開始

1999年夏に私は帰国した。しかし、すぐに父の本を執筆できたわけではない。相変わらず父は反対していたし、私自身、自分のプライベートなことまで精いっぱい、の時期もあった。2000年に上京し、

就職し、また新刊「長春発ビエンチャン行 青春各駅停車」のほうで描いているような、ある男性を追ってラオスまで行ってしまったり……。思い込んだら一直線という性格で、それは父親譲りかもしれない。その後、転職し、地元、愛媛で就職した。

それでも、父への聞き取りや、取材は少しずつ進めていた。形になるかどうか分からなかったが、どうにか形にできたらと思っていた。

2005年春、29歳のとき再度上京した。そして本格的に執筆を始めた。中国残留孤児の裁判がかなり盛り上がっていた時期でもあり、裁判の取材も進めた。そして、このころには父もようやく受け入れてくれるようになり、全面的に協力してくれるようになっていた。そして2007年に無事出版することができた。

私は父のことを知りたくて、残したくて、中国に留学した。留学が多くの出会いをもたらし、また、中国という国と向き合う難しさを感じさせられた。まだまだ分からないことがたくさんある。

ただ、一つ、分かったことがある。それは、「家族」のつながりは国を超えて、血縁も超えて、続いていくのだということだ。

父と養母、二人の関係を知って、私はそう確信した。

2005年、父の育った頭道河子村を訪れた。村には、父の同級生たちがまだ住んでいた。彼らは半世紀以上前の、父との幼少時代の思い出を、まるで昨日のことのように語ってくれた。

そして村の東を流れる牡丹江のほとりに立ったとき、不思議な気持ちになった。初めて訪れる場所なのに、以前来たことがあるような懐かしさを感じた。

河の流れのように、私は家族の歴史の流れに生きている……。そう感じた。

(2月3日・講演会)

講師略歴(きど ひさえ)

1976年 松山市生まれ

1997年 徳島大学総合科学部卒業

1997年～99年 吉林大学留学

出版社勤務を経てフリーライター

著書 『あの戦争から遠く離れて』で

大宅壮一ノンフィクション賞、講談社

ノンフィクション賞を受賞、ほかに

『長春発ビエンチャン行 青春各駅停車』